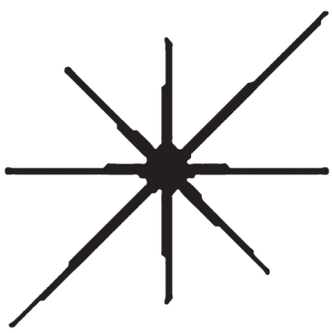
コメット通信

［'21 年 2 月臨時増刊号］



総特集

エコクリティシズムの現在地

comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

他者化せよ
——エコクリティシズムの命題
野田研一——————————03

いのちの絡まりあいに耳を傾ける
結城正美——————————05

「故郷」に向き合う実践としてのエコクリティシズム
喜納育江——————————07

象使いたちのあとを追って
波戸岡景太——————————09

拡散の文化へ
河野哲也——————————11

〈不透明な言葉〉の行方
山田悠介——————————13

文学に現れる環境のエージェンシー
芳賀浩一——————————15

惑乱させる風景
小谷一明——————————17

ことばによる「幻出」
湯本優希——————————19

他者化せよ
——エコクリティシズムの命題

野田研一

昨年 2020 年 4 月，水声社の叢書「エコクリティシズム・コレクション」の 10 冊目が刊行された。それを記念するシンポジウム「自然／他者と相渉る——環境と〈想像力〉に向けて」を，立教大学に拠点を置く「マルチスピシーズ人類学研究会」の主催により開催した（共催：立教・環境コミュニケーション・フォーラム，立教大学 ESD 研究所）。

計 10 冊の執筆者全員が一堂に会したこの研究会の目的の 1 つは，日本におけるエコクリティシズムの現在地点を測ることにあった。まずは表題について若干解説を付しておきたい。「自然／他者と相渉る」というメインタイトルは，自然を他者として明確に定位することを意味している。「自然とはなにか」を問題にする場合，「人間もまた自然の一部である」といった発言をしばしば見かける。このような見解には，人間と自然との差異や対立的関係の存在を無化しかねない論理的陥穽があり，19 世紀ロマン主義の残映が感じられる。20 世紀末の 1990 年代に動き出したエコクリティシズムは，このようなロマン主義を断ち切って，徹底した「自然他者論」を前景化したのである。「他者化せよ」である。

また，このメインタイトルでは，「相渉る」という日本語を使っている。このことばには来歴がある。出典は北村透谷の「人生に相渉るとは何の謂ぞ」（明治 26 年）。透谷がアメリカの思想家 R・W・エマソンの影響を色濃く受けていたことはよく知られている。エマソンがアメリカ・ロマン主義の思想的極点として在り続けていることも併せて考えることにより，透谷をもじって，「自然に相渉るとは何の謂ぞ」とあえて再審に付したいという想いである。その上で，人間と自然の（根源的他者）関係を前提としつつ，身を捩るがごとくに架橋するものとして〈想像力〉という概念を配してみた。

すでに『コメット通信』（第 4 号）に書いたように，〈想像力〉とは文学そのものの謂いである。「自然に相渉る」行為と思惟こそが〈想像力〉の内実を指し示す。今回のシンポジウムで，私は概ね 2 つのことを強調した。1 つは自然の他者性を主題化すること。もう 1 つは，ポストロマン主義の〈想像力〉論を構想すること。他者性を安易に超えないための他者論である。重要なのは，「他者論的転回」を基軸として，〈想像力〉とは何かを，改めてそもそもの初めから再考することである。

個人的な報告では，いろいろ欲張ったことを発言したが，ここでは当面の私自身の課題のみ羅列しておく。

- 石牟礼道子『春の城』論
- 言語における可感性（palpability）の問題……詩的なるものをめぐるエコクリティシズム
- 脱遠近法の風景記述……大岡昇平『野火』（1954）の反風景，反遠近法
- 大岡昇平論……フィクションとノンフィクションのあいだ
- 近代散文の成立における equitone（単一音調的散文：マクルーハン）の問題と遠近法の重なり……言語風景における〈視〉の制度

シンポジウムのコメンテーター 4 名の見解を略述しておきたい。結城正美氏は一方で批評言語の

ジャーゴン化を避けつつ，同時に研究者間の共有・継承の必要性への視座を提起した。氏が例示したのは，二次的自然，エコアンビギュイティ，交感，他者性といった用語であるが，ある意味でこうした共通用語をめぐる議論の深まりが，エコクリティシズムという領域のさらなる展開への動因となることを示唆したものである。文化人類学者シンジルト氏は，現代チベット文学を代表する作家ツェラン・トンドゥプの『黒狐の谷』を紹介しながら，日本語における「環境文学」という用語と中国語における「生態文学」という用語の選択の差異に注目し，人間中心主義的な偏差を脱却しようとする用語の選択として「生態」ということばへの再考を促した。中村邦生氏は，まず用語の問題を引き受けながら，同時にあえて「中心的な問いを先延ばしにする」ことを提案した。これはエコクリティシズムの多様性を担保する上で重要な指摘である。また，場所論の傑作イーフー・トゥアンの『トポフィリア』を援用して，場所愛と身体感覚，そして文学的想像力の結びつきの重要性を強調した。最後に，文化人類学者奥野克巳氏は，文学がことばを対象とする領域だという前提を再確認し，その不毛と豊穣のあいだに生起する相克的な葛藤を踏まえながら，そうした制約や条件を超える原点としての自然あるいは自然（じねん）の方から再帰的に問題を捉えることを示唆した。

エコクリティシズムの仕事は，究極的には，「根源的な人間と自然の関係を問う⇒その深さと恐ろしさを知的な課題とすること」（野田の発言）に尽きるだろう。人間と自然のあるべき関係について，私たちはそう簡単に答を手に入れることはできない。私自身，本稿で「他者化せよ」などという表題を掲げて見せているが，これが究極の答などとは考えていない。ただの条件に過ぎない。「根源的な人間と自然の関係を問う」という命題は，まさに「根源的に問う」ことそのものに最大の意味が懸かっていて，「問い続けること」にほかならない。緊急事態であり，そんな悠長なことを言ってはいられないという向きもあるには違いないが，そういう向きに向かってこそ「問う」こと，「問い続けること」の重要性を強調しておきたい。なぜなら，エコクリティシズムの誕生こそは，このような問いを「問い続けること」の意義に形を賦与し，器を提供したのであるから。

エコクリティシズム以前にも無数に問いは存在した（はずだ）。しかし，〈エコクリティシズム〉という批評カテゴリーの成立は，それら無数の問いに新たな価値と具体的な態様をもたらしたのである。およそ 20 年ほどにわたるエコクリティシズムの歴史そのものが，「根源的な問い」の発現を組織化する過程であった。だから，性急な結論などありうるはずもない。私たちはまだまだこの「根源的な問い」の発現を見据え，かつそれらに多様なアプローチを試みる，その途上にあると言わねばならない。

執筆者について——
野田研一（のだけんいち）　1950 年生まれ。立教大学名誉教授。専攻＝アメリカ文学／文化。日本における環境文学研究のプライム・ムーヴァーの 1 人。小社刊行の著書には，『失われるのはぼくらのほうだ——自然・沈黙・他者』が，小社刊行の論文には，「〈風景以前〉の発見，もしくは『人間化』と『世界化』」（『水声通信 33 号　特集エコクリティシズム』）がある。

いのちの絡まりあいに耳を傾ける

結城正美

自然との「共生」や「調和」といった言葉は，なめらかで使い勝手はよいが，どうも腑に落ちない。文字通り，肚の底からわかった，という感じがしないのである。意味があるように見えるが内容は空虚で，だからこそコンテクストを伴わずに日常言語に浸透し，知らず知らずのうちに私たちの現実感覚を仕立て直している言葉を，言語学者ウヴェ・ペルクゼンは「プラスチック・ワード」とよんだ[(1)]。自然との「共生」や「調和」もその部類に入るだろう。

プラスチック・ワードに飼いならされた現実感覚を揺さぶる文学実践に着目し，それを “listening” という枠組みで論じたのが，『水の音の記憶――エコクリティシズムの試み』（2010 年）と『他火のほうへ――食と文学のインターフェイス』（2012 年）である。“listening” は，“hearing” という知覚行為とは異なり，耳を傾けるという態度を含む。それは，他者の言葉を待つ，他者に自己をひらく，ということでもある。2020 年末に 75 年の生涯を閉じたアメリカのネイチャーライター，バリー・ロペスは，世界各地を旅したトラベルライターでもあり，北極圏やアフリカで出会った人びとから土地と親密な関係を築く方法を学んだという。彼がアラスカ北部の先住民ヌナミュートの男性に，見知らぬ風景を前にしたときどうするかと問うたとき，男性はこう応えたそうだ――“I listen”[(2)]。

『水の音の記憶』で論じた日米の作家（田口ランディ，石牟礼道子，テリー・テンペスト・ウィリアムス，グレーテル・アーリック，カレン・テイ・ヤマシタ，森崎和江）の作品には，耳を傾けることで現出する人と環境の関係が描かれている。たとえば，ハイブリッドな言語で水俣病問題を多角的に描いた石牟礼『苦海浄土』では，水銀汚染によっても切れない漁民と海の絡まりあいが，言葉の絡まりあいとして，すなわち，場所を語る言葉が場所が語る言葉でもあるような方言のサウンドスケープとして表出している。同様のことは，ウィリアムスのアメリカ西部荒野をめぐる作品にも言える。荒野に不毛の烙印を押す一般的傾向とは対照的に，ウィリアムスは荒野に耳を傾け，応答を待ち，そして荒野に応える，という双方向的関係（ウィリアムスのいう「エコーシステム」）を通して，荒野との親密性を表現している。耳を傾けることでつながりが感得されるのは，水俣や西部荒野などルーラルな場所だけではない。ヤマシタは，ロサンゼルスのフリーウェイが入り組むコンクリートの風景に，太古からその地に刻まれてきた人間の営みを聴覚的に織り込み，都市的価値観を軽やかに揺さぶってみせる。

人であれヒトでないものであれ他者と向き合うとき，自分の見方を押し付けるのではなく，まず耳を傾けるということを，私は拙著の方法論を定める上で最も意識した。エコクリティシズムは実に多様な批評実践であるが，私自身は，「批評する私たち自身の言語世界ならびに思惟様式を不断に問うような，反体系的で反方法主義的な」立ち位置をとる[(3)]。批評理論用語自体がプラスチック・ワードになる危険性を孕んでおり，それを避けたという思いもある。

耳を傾けるという批評方法の延長線上に，スコット・スロヴィック氏によって提唱されたナラティブスカラーシップがある。これは，作品の舞台に赴き，その場所での観察，思索，経験を作品分析に織り込むという研究方法で,『水の音の記憶』では石牟礼論とウィリアムス論でこの手法を取り入れた。研究方法としての “listening” は，インタビューと論考を併置するという形で，『他火のほうへ』に引

き継がれている。4 人の作家（石牟礼，田口，森崎，梨木香歩）へのインタビューでは，食への文学的アプローチに関して私が抱いていた疑問を投げかけると同時に，作品として結晶化する以前の，作家の思念の種子のようなものに接近することを試みた。

1990 年代半ばに日本にエコクリティシズムを紹介した野田研一は，日本には環境文学的なものが昔からあるという反応に落胆したと述べ，日本文学を自然に親しい文学とみる常識自体を問題視している [(4)]。日本の「環境文学的なもの」が，ハルオ・シラネのいう「二次的自然 [(5)]」，あるいはカレン・テイ・ヤマシタのいう「俳句的瞬間 [(6)]」であるならば，そのような自然だけを注視しているわけにはいかない。自然観は言葉と絡まりあっている。プラスチック・ワードの陥穽を嗅ぎとり，腑に落ちる言葉を見出していかねばならない。エコクリティシズムの喫緊の課題である。

（1）　ウヴェ・ペルクゼン『プラスチック・ワード――歴史を喪失した言葉の蔓延』糟谷啓介訳，藤原書店，2007 年。
（2）　Barry Lopez, *The Rediscovery of North America*, 1990, Vintage, 1992, p. 35.
（3）　結城正美『水の音の記憶――エコクリティシズムの試み』水声社，2010 年，27 頁。
（4）　渡辺憲司，野田研一，小峯和明，ハルオ・シラネ編『環境という視座――日本文学とエコクリティシズム』アジア遊学 143，勉誠出版，2011 年，17 頁。
（5）　ハルオ・シラネ『四季の創造――日本文化と自然観の系譜』北村結花訳，角川選書，2020 年。
（6）　管啓次郎×カレン・テイ・ヤマシタ「『わたし，キティ』をめぐって」小谷一明他編『文学から環境を考える――エコクリティシズムガイドブック』勉誠出版，2014 年，24 頁。

執筆者について――
結城正美（ゆうきまさみ）　1969 年生まれ。青山学院大学教授。専攻＝アメリカ文学，エコクリティシズム。小社刊行の主な著書，訳書には，『水の音の記憶――エコクリティシズムの試み』，『他火のほうへ――食と文学のインターフェイス』，デイヴィッド・エイブラム『感応の呪文――〈人間以上の世界〉における知覚と言語』などが，小社刊行の論文には，「エコクリティシズムをマップする」（『水声通信 33 号　特集エコクリティシズム』）がある。

「故郷」に向き合う実践としてのエコクリティシズム

喜納育江

拙著『〈故郷〉のトポロジー――場所と居場所の環境文学論』を水声社から出版させていただいて10年が経った。真っ先に思い出すのが，脱稿を目指していた矢先の2011年3月に，東日本大震災が起こったことである。未曾有の自然災害であったと同時に，想定を大きく超えた「人災」だった。放射能汚染など，様々な理由で故郷を離れざるを得なくなった人々の思い，故郷での生業を失った末に死を選択した人々の絶望を想像するたびに，今も胸が締めつけられる。

拙著を書く前，2000年頃の私は，エコクリティシズムを，故郷である沖縄という場所と自分との関わりを考えるアプローチの一つだと考えていた。「自然と人間の関係」への深い関心からというより，植民地主義や軍事主義に起因する負の遺産を抱える故郷にいかに対峙するかという，「故郷と私」の問題意識から関わり始めた学問だったように思う。エコクリティシズム・コレクションとして単著を出すことになったとき，アメリカ先住民文学を研究していた私がまず論じようと思ったのは，「先住民」としてその場所に生まれた人々が，その場所に愛着を抱き，深い絆を育みつつ，いかにそれが「故郷」に呪縛されることと同義にもなっているかについてだった。しかし，震災後の東北の風景や人々の映像や声が織りなす「現実」を目の当たりにして，私は，たとえ多くの傷や問題を抱える故郷であっても，故郷に生きるという選択肢があることの意味について改めて考えさせられることになった。

沖縄戦から70年余りが過ぎ，亜熱帯島嶼の豊かな森林を米軍の軍事訓練場として囲い込まれ，人々を飢えから救ってきてくれた海を権力に売り渡す，それが私の故郷の過去であり現在である。不完全な風景であっても，それが自分の故郷であり，それと共に人生を全うしようと覚悟を決めたとき，ウランの採掘と核実験で傷ついた故郷の大地に生きるアコマ・プエブロ族の詩人サイモン・オティーズや，沖縄の基地の街で，声を聞き取られないまま消えていった人々の沈黙に寄り添い続ける小説家崎山多美の物語に共鳴するのに時間はかからなかった。拙著ではこれに加え，常に国家と国家，文化と文化の「狭間」に置かれてきた米墨国境の「境域」を出自とするチカーナのグローリア・アンサルドゥーアやシェリ・モラガについても論じた。チカーナの表現する米墨国境の「境域文化」は，異なる文化に支配され，その影響と葛藤の中で独特の文化を醸成してきたという点で沖縄の文化と通底していると思ったからだ。

一方で，このように「故郷」と呼べる場所との結びつきの中で一生を終える人ばかりがいるわけではないことに無関心だったわけではない。「故郷」の喪失や欠如を起点とし，「再定住」の営みを通して「居場所」としての「故郷」を新たに創造する人々もいる。東京の神田に生まれた詩人の山尾三省は，屋久島に移住し，新たな場所で人生を全うした。20世紀の初めに移民として渡米し，日本画の繊細なタッチでアメリカ西部の圧倒的な大自然を描き出し，芸術表現を通して新しい場所への定着を試みた画家の小圃千浦もいる。そして，日系アメリカ人のデイビッド・マス・マスモトは，生業である「農業」を通して，日系アメリカ人の歩んだ歴史とアメリカ西部の生態系の記憶を切り結ぼうと試みた。あるいは，アンサルドゥーアのように，クイアとしての生き方を故郷から否定されて，新たな土地に居場所を創造した書き手もいる。

しかし，「故郷」という居場所を欲する限り，人間は，その場所や，その土地に生きる生命とどの

ような関係を構築すべきかをエコクリティカルな視点で考え続けなければならない。「再定住」や「新たな居場所の獲得」をめざす個々のプロセスがいかに苦難に満ちたものであっても，その土地ですでに歴史を重ねてきた人間や生きものからすれば，そのプロセスは常に「移民による植民地主義（settler colonialism）」と隣り合わせであるし，一方で，先住民だからといってその土地を自分の所有物とすればそれもまた植民地主義になる。植民地主義に陥ることなくある場所を「故郷」や「居場所」にするためには，自分自身を他者化すると同時に，自分以外の「他者」の気配に敏感になる必要があると思う。

すなわち，エコクリティシズムは，「他者」としての自分のポジショナリティを再構築する実践であり，同じ場所で周縁化されている別の「他者」に寄り添おうとする実践なのではないだろうか。そして，エコクリティシズムが「他者」への想像力を促す実践であるとするなら，私にとって向き合うべき「他者」はおそらくこれからも「故郷」なのだ。被災地となった故郷からやむなく離れた人々のその後の人生を想像しながら，そんなことを考えている。

執筆者について——
喜納育江（きないくえ）　1967 年生まれ。琉球大学教授。専攻＝アメリカ文学，ジェンダー研究。小社刊行の著書には，『〈故郷〉のトポロジー——場所と居場所の環境文学論』が，小社刊行の論文には，「進化するエコ／フェミニズムとクイアエコフェミニズムの可能性」（『水声通信 33 号　特集エコクリティシズム』）がある。

象使いたちのあとを追って

波戸岡景太

エコクリティシズムが米国のアカデミズムで具体的なかたちをとりはじめた1990年代初頭，その仮想敵のひとつには，ポストモダン批評とその系統の文学があった。だから，トマス・ピンチョンというポストモダン文学の急先鋒に対し，環境意識や動物表象という切り口から博士号請求論文を書くという若き日の私の試みは，日本ではまだ無謀であると思われ，実際にそのように面罵されたこともあった。だが，博論リサーチのために訪れた，当時のエコクリティシズムの牙城たるネヴァダ大学リノ校の人々の反応は違った。2004年秋，彼らの多くはジャック・デリダの訃報に胸を痛めつつも，欧米の文学地図にも確かな地殻変動が起きていることを感じとっていたのだ。

そうして書かれた私の博論は，2011年夏，エコクリティシズムの名を冠した本邦初の研究書コレクションの一冊として上梓された。もちろん，『ピンチョンの動物園』という研究書らしからぬタイトルに戸惑った読者も少なくなかったに違いない。だが，私は別に奇をてらったわけではなかった。小説という人工空間に囚われた動物のすがたは，動物園という人工空間に生まれ死んでいくものたちとのアナロジーによって語るのが，何よりふさわしいように思えたのである。

そして私は，『ピンチョンの動物園』の刊行によって広がった文学批評の可能性を信じ，今度は，専門の枠にとらわれない対談にのぞんだ。お相手をお願いしたのは，社会学者の大澤真幸氏，小説家の古川日出男氏，そして詩人の管啓次郎氏。それぞれの分野の第一線をひた走る彼らを相手に，いまだ駆け出しの私がどうしても話したかったテーマとは，つまるところ，動物とは「誰」なのか，ということであった。かくして，三者との対談は，『動物とは「誰」か？——文学・詩学・社会学との対話』というタイトルのもとに，ふたたび「エコクリティシズム・コレクション」の一冊として刊行された。

あれから9年がたち，私はいまだ動物表象へのこだわりを捨てきれずにいる。ただし，私のそのこだわりは，現代思想の名のもとに抽象化されていく「動物的なるもの」への拘泥とは，きっと性質を異にするものなのだろう。ネヴァダ大学に旅立とうとしていた院生の頃から私を突き動かしてきた言葉のひとつに，村上春樹がデビュー長編に書き付けた「例えば象について何かが書けたとしても，象使いについては何も書けないかもしれない」という一文があるのだが，私にとっての「象使い」とは，とどのつまりが物語を生み出す作家たちに他ならず，彼／彼女らとの関係性のうちに立ち現れる動物こそが私の長年の興味の対象であったのだ。

もちろん，象使いたちのフィールドは，文章だけにとどまらない。今，私が強い関心をもっているのが，映像作家や写真家たちの仕事だ。北米のグリズリーにせよ，日本の野良猫にせよ，彼らの作品は実物そのものを視るということに全力を傾けているため，一見したところ，文学的修辞にまみれた動物表象とは全く異なるもののように思える。だが，エコクリティシズムの方法論を用いるならば，環境ドキュメンタリーや動物写真に記録された動物たちもまた，それぞれの「象使い」が独自に開発したトリックによって，ある種の芸を披露している（させられている）ことは明らかだ。だから，批評家としての私たちが注視すべきは，その「象使い」たちの意識そのものであり，とりわけ「環境意識」と呼ばれるものの強度を——それは必ずしも善悪の二項対立とはリンクしていないが——，私自身は作品評価の基準に据えていこうと考えている。

こうした私の姿勢は，たとえば2005年に制作されたヴェルナー・ヘルツォーク監督のドキュメンタリー作品『グリズリーマン』によっても後押しされる。ただし，この映像作品の「象使い」は，じつはヘルツォークひとりではない。もうひとりの「象使い」は「グリズリーマン」ことティモシー・トレッドウェルであり，映画『グリズリーマン』は，トレッドウェルが遺した膨大な量のビデオテープをめぐる，いわばメタ・ドキュメンタリーなのである。では，トレッドウェルのテープに何が記録されていたかといえば，それは，アラスカの大地に生きるグリズリーたちの姿であり，グリズリーの守護者を気取ったトレッドウェルの「自撮り」映像であり，そして，残酷なことに，グリズリーがトレッドウェルと彼のガールフレンドを殺す（映像なしの）音声であった。

「グリズリー使い」の生と死に向き合うヘルツォークの仕事は，いわゆる動物ドキュメンタリーとは一線を画すけれど，表象というものを間に挟んで成り立つ動物と人間の関係を切り取る彼の批評的視座は，私のめざすエコクリティシズムのそれと確実にオーバーラップする。そこに垣間見られる，クリティシズムもまた作品になりうるといった可能性に励まされつつ，これからの10年もまた「象使い」たちのあとを追いたい。

執筆者について——

波戸岡景太（はとおかけいた）　1977年生まれ。明治大学教授。専攻＝アメリカ文学，文化論。小社刊行の主な著書には，『コンテンツ批評に未来はあるか』，『ピンチョンの動物園』，『動物とは「誰」か？——文学・詩学・社会学との対話』などが，小社刊行の論文には，「日本の森のあいまいな私」（『水声通信33号　特集エコクリティシズム』）がある。

拡散の文化へ

河野哲也

『いつかはみんな野生にもどる――環境の現象学』で私が行いたかったことは，環境に身を浸すことによって生じる思考の変化を記述することであった。2014 年から 2015 年にかけていただいた研究休暇の間，私は，テキサス州デントンにあるノース・テキサス大学の環境哲学研究所の客員研究員になった。テキサスを起点として，アメリカ合衆国の南部州はもちろん，メキシコ，アリゾナ，ヨセミテ，チリのプンタ・アレーナス，プエルト・ウィリアムズ，パタゴニアと亜南極圏，フランスのコルシカ島とイタリアのトリエステ，キューバ，屋久島，シンガポールなど，毎月何度も出張し，非常に多くの場所を旅行し，その経験を毎日のように日記につけた。体験を綴ることによって引き出されてくる知識や情報も同時に書き留めておいた。

その日記を読める形に書き起こし，起点のテキサスから，訪問した場所を，時間順ではなく，東から西へと地球一周するような順序で配置した。そう，日記による哲学を気取り，太陽を中心に地球が一周するのではなく，地球を中心に自分が一周することを「ジャーナル（日誌）」と呼んだつもりだったのである。一年という長い一日のつもりだったのだ。

前著は，移動と旅行の哲学であったが，現在，関心があるのは，陸前高田市や気仙沼市など，東日本大震災以降に毎年訪問するようになった三陸地方の町が，被災と復興事業を経て，この十年でどのように変化したのか，それらがこれからどのように変化していくのかを，時間を追って，環境哲学的に考察することである。両市とも，日本の地方が抱えている問題を，大津波によって加速されたかのように，より深刻な形で経験している。もうひとつ，私がもっとも頻繁に訪問している地方である沖縄について，その自然と地域の人々の関係についても考えてみたい。そうして，日本の地方の問題について，それが近代化の問題そのものであることを指摘しながら，今後の世界と文明のあるべき姿をそこから模索してみたい。

そこで理論的に展開したいのは，フランスの哲学者であり，船乗りであるミッシェル・セールの「自然契約」の概念と，2019 年の日本哲学会で筆者が提示した「拡散の文化」の考えである。

人間にとって自然は他者である。自然の他者性とは，自然が人間の利益に無関心であり，ときに人間の利益を脅かす存在であることを意味している。にもかかわらず，人間はこの他者を尊重しなければならない。セールによれば，社会契約という考えは，人間の世界から自然という他者を排除し，自然への寄生的濫用を正当化してきた。これから人間は，地球と新たな「自然契約」を結ばねばならない。その契約は双務的であり，地球を利用した人間はそれが復元するまで，「支払い」をしなければならない。拙論の「拡散の文化」とは，自然と双方向的にレジリエントな関係を維持するために，人間同士が拡散して生きることに最大の価値を認める文化である。日本では，「環境保護」というと，経済の停滞を耐え忍び，何か我慢して窮屈な思いをしなければならないかのように考えられている。そうではなく，人間関係の拘束から生じる過剰の重荷を下ろすような，「ゆるい」文明と「ゆっくりした」社会を構想しなければならない。変えるべきは，経済の対象となる価値であり，職業と経済を蔑ろにするのではない。以上をテーマとした著作を発表したいと考えている。

環境問題は待ったなしである。温暖化の危機はもちろん，汚染や資源の枯渇など明るい話題が出て

こない。多くの人間が，狭い都市の中で，自然からの影響をシャットダウンして生きている限り，環境問題についての自覚は生まれにくい。東アジアの諸都市は，その点で非常に危惧すべき状態になっている。自然環境に接することで，その守るべき価値を，直接にひとりで，見いだせる人は多くはない。私も，山登りが好きだった祖父と父，狩猟や釣りを好んだもうひとりの祖父の影響で，自然を愛しているのかもしれない。自然の中で生きながら，その自然を形而上学的に，あるいは詩的に把握する視点が必要なのだ。エコクリティシズムは，自然と人間との関係を捉えるための多様な視座を読者に与えてくれる。環境問題は，一方で，政策や法律によって推進しなければならないが，他方で，それを下支えし，環境保護を楽しめる新しい文化を作る必要がある。この点において，今後の日本のエコクリティシズムには，環境文化を開花させ，それを育てる滋養分になることを望んでいる。とくに，博物学や自然科学的な知識と，文学的要素の両方を含んでいるような読み物がもっと出版されないだろうか。環境文学は，半ば文学，半ば批評のようなエッセイの形をとってもよいだろう。児童用のエコクリティシズムの著作が小中学校の教科書に採用されることも願っている。

執筆者について——
河野哲也（こうのてつや）　1963 年生まれ。立教大学教授。専攻＝哲学・倫理学，教育哲学，哲学プラクティス。小社刊行の著書には，『いつかはみんな野生にもどる——環境の現象学』がある。

〈不透明な言葉〉の行方

山田悠介

『反復のレトリック――梨木香歩と石牟礼道子と』のもととなった博士論文を執筆していたある日，指導教員だった野田研一先生から，「不透明が問題ではないか」との指摘を受けたことがあった。

ここで言う「不透明（性）」とは，言語（記号）の一つのあり方を指す概念で，「透明（性）」と対をなす。大まかに言えば，〈透明な言葉〉が言語というメディアの存在を意識せず（させず）にやりとりされる言葉を指すのに対して，〈不透明な言葉〉は，言葉＝メディアそのものにコミュニケーション参与者の意識を向けさせる言葉，言葉そのものが「一種の抵抗感のある〈もの〉」として現前するような言葉を指す（藤原克己「二〇〇八年パリ・シンポジウム　総括」寺田澄江ほか（編）『二〇〇八年パリ・シンポジウム　源氏物語の透明さと不透明さ』青簡舎，2009 年，206 頁）。

もちろん，現実に使用される言葉を截然と二分できるわけもないし，言葉が透明／不透明のどちらになるか（どう受け止められるか）は，受け手やコンテクストによって異なる。こうした点に鑑みると，言語の透明（性）／不透明（性）は曖昧で漠とした概念と言えなくもないが，それでもしかしこの対概念は，（とくに「近代」の）言語および文学の〈ことば〉について思考する際の一つのメルクマールとなっている（cf. 北川扶生子『漱石の文法』水声社，2012 年など）。

さて，それではこうした言語の不透明性（／透明性）の概念と，エコクリティシズム・コレクションの一書をなす拙著の議論は，いかに切り結ぶのだろうか。

結論から言えば，両者は「反復」において交わる。拙著でも論じたように，反復は，ロマン・ヤコブソンが言語の機能の一つとして析出した「詩的機能」の要である。その詩的機能が言葉を不透明にする言語の機能という側面を持つのであれば，その要たる反復は当然，〈不透明な言葉〉を創出しうる言葉の〈あや〉（文彩）ということになる（cf. 藤原，同書）。

結局，博士論文においても拙著においてもこうした点にまで踏み込んで議論を展開することはできなかったのだが，以上を踏まえ，「不透明」という言葉を用いて拙著のねらいを改めて述べれば，次のようになる。すなわち，環境文学作品のなかで反復によって言葉が不透明になるとき――そのように読者（私）に感じさせるとき――，何が起きているのかを明らかにしようとした，と。

哲学，言語学，レトリック論などの知見をもとに反復の意味と機能について考察しつつ，現代の日本とアメリカのいくつかの環境文学テクストを分析することで見えてきたのは，音，語，構文などさまざまなレベルの反復によって散文の言葉が不透明性を帯びるとき，人と人，あるいは自然と人間のあいだに〈何か〉が起きる，という構図であった。詳細は拙著を参照されたいが，その〈何か〉には，動物と人間のあいだの〈変身〉や，植物の〈声〉を聴くことや，鳥の〈声〉を想像すること，自然の「主体性」や「他者性」と向き合おうとする言葉のやりとりなどが含まれていた。反復によって〈かたち〉をなす言葉の数々。そこには，〈何か〉――〈交感〉と呼ばれる，「関係」ないし「コミュニケーション」――の本質や，「近代」の言語および言語観や，〈不透明な言葉〉とは何かを問い直す手がかりがあるように思われてならない。

ところで，〈不透明な言葉〉から目を転じ，環境文学における〈透明な言葉〉に光を当てたとき，いったい何が見えてくるのだろうか。

〈透明な言葉〉はいかに創り出されるのかという「技術」(＝「テクノロジー」(cf. サイファー, W.『文学とテクノロジー』(野島秀勝・訳) 白水社, 2012 年)) をめぐる問題を見据え, 同時に, そもそも〈透明な言葉〉は果たしてどれほど「透明」なのかという根本的な問いも視野に入れながら, たとえばネイチャーライティングを論じたらどうなるだろうか。ノンフィクションというジャンルは一見, 〈透明な言葉〉と親和性がありそうだが, 果たしてそうと言い切れるだろうか。文学のなかの「リアル」な〈自然〉とは, 〈自然〉の「リアリティ」とは何か。「自然を表現するにはやはり極端に言えば, この世にあらざるように美しく書きあらわさなければならないと思っています」という石牟礼道子の言から (『〈石牟礼道子全集・不知火〉第 3 巻』藤原書店, 2004 年, 503 頁), 私たちは何を考えることができるのか……。無数の問いが浮かんでくる。

私自身はこれからも, 自然と人間と言葉の関係を問うてゆきたいと考えている。エコクリティシズムの領域においても, (環境) 文学の〈ことば〉に焦点を当てた研究が大きく展開してゆくことを願ってやまない。文学の〈ことば〉にこそ, 問いが, そして問いへのヒントが秘められているのだから。

＊　本稿は,『科学研究費補助金基盤研究 (B)「日本のネイチャーライティングにおける交感表象の歴史的様相」成果報告書』所収の拙論「文学・言語の〈透明性〉と〈不透明性〉をめぐるメモランダム――明治期の『美文』を手がかりに」(2018 年) の議論にもとづくものであることをお断りしておく。

執筆者について――
山田悠介 (やまだゆうすけ)　1984 年生まれ。大東文化大学講師, 立教大学 ESD 研究所研究員。専攻＝環境文学。小社刊行の著書には,『反復のレトリック――梨木香歩と石牟礼道子と』がある。

文学に現れる環境のエージェンシー

芳賀浩一

1. 自分は何を論じたのか

『ポスト〈3.11〉小説論——遅い暴力に抗する人新世の思想』（水声社，2018 年）において私がまず論じたかったのは，東日本大震災後の小説に表出した震災の作用（エージェンシー）についてである。佐伯一麦の『還れぬ家』（新潮社，2013 年）の第 80 節の前に見られるような語りの時間の変化に震災のエージェンシーの痕跡を見出し，擬人化して言えば「地球が地震を通して書く」ことを示そうとした。これは物質のエージェンシーの私なりの解釈であり，エコクリティシズムによる読解の一例にはなったのではないかと考えている。

また本書の冒頭では副題にある「人新世」の紹介をしている。人新世とは人間の行為によって地球環境が大きく変化した時代のことだ。人新世において人間の行為は自然環境における最大級のエージェンシーとして認識されるが，東日本大震災もまた人災の側面が無視できない複合災害である。また「遅い暴力」というロブ・ニクソンの言葉は，日本の周縁に位置し長い時間をかけて同化された「東北」の歴史性を想起させる。この副題には地震と歴史の反復と再帰性を描き出す，という意図が込められている。

さらに，本書の第 1 章においては東日本大震災をテーマとした小説を可能な限り紹介するよう心掛けた。後進の研究者への資料的価値を念頭に，作者とタイトルだけではなく，先行研究や本の内容にも触れるようにした。そして第 2 章では，エコクリティシズムの理論を紹介している。エコクリティシズムは非常に多様な（異なる）思想を含んでおり，その中でも物質的なエコクリティシズムを紹介することで本書における発想の源を読者と共有したいと考えた。

第 3 章以降では，東日本大震災後の小説の中から特に物理的，あるいは思想的に震災の影響が明らかな作品について論じた。この本で最終的に示したかったことは，地殻の変動，津波，放射性物質といった物質的環境のアクターたちが作家の意図や社会的な要因と同様に，しかし異なる形で文学の想像力に作用していることだ。これは現代のエコクリティシズムの根幹にある認識だと考えている。

2. これから論じたいことは何か

私はこの本で東日本大震災と人新世を結び付けて考えた。今後は執筆過程で得た認識を掘り下げ，21 世紀の環境シフトの意味と文学評価の在り方を再考・整理し，人新世概念にリアリティーを与えた最大の要因である地球温暖化に向き合う文学を分析・評価していきたいと考えている。世界を背景に国家を基本的な枠組みとして俗語革命を推進したのが近代文学であるとするならば，地球の有限性に直面した人新世時代の文学は専門化・細分化した学問分野をつなぎ隙間を照らす役割を担っているのではないかと思う。これは文学の役割のごく一部だが，まだ充分に掘り下げられていない点であり，今後論じていく予定だ。

3. 今後の日本のエコクリティシズムに期待すること

私自身まだ最初の企てに手を付けたばかりであり，他の研究者に期待をする以前に自分自身の課題が山積していると感じている。しかし未来のことを考えると，若い人たちに対して多くの期待がある。

それは主に自分の学力不足への反省から来るのだが。

まず，英語の壁をなくすこと。ブロークンでもよいので自分の言葉として英語を使い海外の学会に躊躇なく参加してほしい。さらにグローバル化した今日においては第二外国語を学ぶことで多文化的思考の基盤を形成することも重要だ。その過程で日本の文化・文学に親しんでいることの大切さも自ずと明らかになる。そして最後に挙げておきたいのが理科系の学びだ。環境は文理融合の分野だとよく言われる。良くも悪くも最先端の科学によって地球環境は明らかにされる。そして数字や統計をどのように受け取るかによって環境問題の意味は大きく変化する。エコクリティシズムには科学的知と文学的知を橋渡しする役割があると私は考えている。日本は世界的に見ても小・中・高等学校における理数科教育のレベルが高く，その学びの経験を文系の学生が受験期に放棄してしまうのは大きな損失だ。文系的（あるいは理系的）な教養やスキルは受験システムの産物であり，複合的な環境を考える際にはどちらも十分とは言えない。日本の初等中等教育の強みを活かし，大学においても理数系の学びを継続することで，日本の文系学生が世界のエコクリティシズムに貢献するような研究者に成長するのではないかと期待している。

執筆者について——
芳賀浩一（はがこういち）　1970 年生まれ。城西国際大学准教授。専攻＝批評理論，比較文学。小社刊行の主な著書には，『ポスト〈3・11〉小説論——遅い暴力に抗する人新世の思想』がある。

惑乱させる風景

小谷一明

19 世紀，日米において研究者や陸軍，官民の機関団体が測量的な視座で地形や地質を見定めていく。紀行文に風景画，風景写真も巷にあふれ出た。その風景は 20 世紀においても多様な要因によって変容し，多くの言葉が紡ぎ出されるきっかけとなる。この風景の変容，豹変に立ち合ったと思しき作家，作品を多く取り上げて論じたのが拙著『環境から生まれ出る言葉』である。変わりゆく「風景」に立ち合った作家は，どのような言葉で場所を記したのか。環境の変化に触発されて生み出された言葉からは，何が読み取れるのか。

拙著ではインタビューを含め，林京子に多くのページを割いている。被爆という経験を終わりにしたいと思いながらも引き戻され，出遭い直し続けた作家の林は，生涯にわたって，「原子野（ナガサキ）での死は上海で見た死（第二次上海事変頃から 1945 年までの死）と違う」と言い続けた。これは言葉にできない 8 月 9 日の「場景」がその原因としてある。戦後，被災地をたどり直すなかで，見えていないものを見ていたり，見えなかったものが見えてくる体験を林は書き続けた。そして，21 世紀を目前に，米国西部であの日のナガサキを追体験する。林は「カルテ」の如く「やせた言葉で」身体を，被爆地を記し続けた。大田洋子のように多様な文体を取り混ぜながら，修飾語に背を向けるようにシンプルな言葉で書き続けた。

林が晩年に訪れた広大無辺な赤土と砂漠の西部。そこでマイク・デイビスが目にした光景は，彼の感覚も惑わせた。車を走らせるなかで目にした先住民集落の立ち入り禁止の門札，突如視界に現れたテーマパークのように見える巨大な軍事ケミカル・プラント。氷河期時代の痕跡も残す西部で，近未来までもが同時に並存するような空間に，彼はインフェルノであり崇高な場景を感得する。こうした場の把捉に際しての惑乱が，彼を繰り返し西部の荒野へと立ち戻らせた。視野に収めながらも受け止めきれない，言葉にできない場所だからこそ，その地を描こうと駆り立てられもする。場所への違和感，場所からの疎外感を着目すべき環境表象実践とみなし，場所との遭遇が主題となる作品を拙著で扱った。感覚と言語のはざまで揺れ，風景として立ち上がらない場所に佇む作家たち。彼らの「惑い」に関する論考である。

こうした言葉から切れたような場所において，逆説的に近代の視座や言葉も浮かび上がる。水上勉の若狭を描く作品では，言葉が「中央」から越流して言語風景が変えられた後，故郷は「裏日本」の原発立地となり，地元への無関心も広まっていった。「裏日本」という呼称は「風景以前」（野田研一）を鄙びた風光明媚な場所に変えつつ，「周縁」で中央志向を醸成する。言葉で創られていくふるさとの風景変貌は，自然を踏み台にした近代化を後押しした。ここから浮かび上がるのが，定義権を持たない自然である。自然を「中央」の言葉から解放し，その言葉に縛られたわたしらをも解き放つ試みが，取り上げた近現代の文学作品では目指されていたと思う。

しかし，論じそびれたことがある。風景という地表のことではなく，その下にある地底のことだ。エコクリティシズム・コレクションの芳賀浩一『ポスト〈3.11〉小説論』および波戸岡景太『動物とは「誰」か？』に記されたエネルギーという不可視のモノが，環境認識およびその表象にどのような影響を与えてきたのか。「裏日本」の新潟を例にあげると，自然豊かな地と言われながらも，河川工

学者の大熊孝が近著『洪水と水害をとらえなおす』（2020）で述べたように，新潟はその豊かさで生み出されたエネルギーを中央に提供している。その「献上」を誇る地元民もいる。一方，明治末期以降の作品を収めた『ふるさと文学館　第 19 巻　新潟』（1994）では，雪国の過酷な生活や暗澹とした生活風景が数多く描写されている。豊かな自然の恩恵を受けていないかのように過酷さを前景化する言説には，地底という場所の感覚が環境表象に紛れ込んではいないだろうか。

今秋，主に東アジアの国や地域から多くの研究者が参加する，第 7 回目の文学・環境研究シンポジウム（非対面式）が，ASLE-Japan/ 文学・環境学会主催で開催される。海をはさんだ「生態地域的な」（bioregional）エコクリティシズム研究の交流を促進させていくことは，3.11 以降，さらに重要な課題となっている。エネルギーの環境表象を分析する学際的な共同研究を深められないものだろうか。戦前，エネルギーが東南アジアへと人の移動を促し，自他の環境認識を形成したが，こうした圏域と出遭い直すためにも，互いの環境文学を学び合える場を拡大できたら，とも考えている。

執筆者について――
小谷一明（おだにかずあき）　1965 年生まれ。新潟県立大学教授。専攻＝アメリカ文学，環境文学。小社刊行の著書には，『環境から生まれ出る言葉――日米環境表象文学の風景探訪』が，小社刊行の論文には，「エコ・コスモポリタニズム――ウルズラ・K・ハイザをめぐって」（『水声通信 33 号　特集エコクリティシズム』）がある。

ことばによる「幻出」

湯本優希

「白雲の靉靆たるが如く，紅錦の幔幕をめぐらしたるが如し」。明治 34 年に杉本書店から刊行された不老庵主人編『美辞類纂』の，「春」に採録されている美辞麗句である。「春」の花の中でも，白と紅が対比された色彩になっていることから梅を表現していることが看取できる。『ことばにうつす風景――近代日本の文章表現における美辞麗句集』の帯文として掲載していただいた美辞麗句である。

明治期の作文という文化の流行を背景に非常に数多く刊行され，人口に膾炙した美辞麗句集は，しかしこれまであまり注目されてこなかった。美辞麗句集とは，書き手が表現したい題材の項目を辞書のように引いて利用することが想定されたいわば文章表現集である。たとえば前掲書『美辞類纂』の目次には「昼夜」「風雨雷電」「山と水」などの項目が並ぶ。このように美辞麗句集には，風景を描くための美辞麗句に紙幅が割かれているものが散見される。さらに，書簡文例や紀行文など，各種テーマに特化した美辞麗句集も存在していた。美辞麗句集の形態はさまざまだが，1 段組，2 段組，3 段組が主流で，同じ題材に対し，上段に語，下段に美辞麗句といったように配置されており，下の句の中の語を上と入れ替えて独自性を打ち出すことが可能になるものもある。『国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録』第 4 巻　語学・文学の部（国立国会図書館，昭和 48 年）によれば，「収録タイトル一覧」では 1 位の近代小説（3071 点）に続き 2 位が作文（2713 点）であることに鑑みても，明治期における作文という文化は看過できないだろう。本書は，これまで個別の領域で捉えられてきた諸問題を貫く指標として，美辞麗句表現を中心に据え近代日本の文章表現史を明らかにすることを目的としている。

本書第 1 部「美文と紀行文の境界をめぐって」では，美辞麗句表現が美文や紀行文などさまざまな文章ジャンルを架橋する存在であり，どのように位置づけられるかについて言及している。たとえば羽田寒山編『美文大辞典』（矢島誠進堂, 明治 33 年）や野沢潤編著『千景万色記事紀行文』（岡本偉業館, 明治 37 年）のように，美文や紀行文を書く際の資料としての美辞麗句集も多くあり，さらにいえば梅泉先生『美文資料紀行作例』（小川尚栄堂，明治 34 年）という美辞麗句集も見られる。美文と美辞麗句表現は決して同じものではなく，多くの文章ジャンルの中の要素として抽出できるのが美辞麗句表現である。

第 2 部では，第 4 章・第 5 章と連なり，「月ヶ瀬」と「杉田」という東西の二大梅林が描かれた幕末期から明治期にかけての観梅紀行文を追い，そこで踏襲されていた美辞麗句表現を美辞麗句集と対照させる調査を行った。これにより，美辞麗句表現の受容と再構築の展開や共有の様子を明らかにし，さらに第 6 章では美辞麗句集の出版界への影響を詳らかにしている。

第 3 部では，第 1 部・第 2 部を踏まえ，美辞麗句表現によって風景を描くという営為そのものを追究している。第 7 章では, 明治 28 年に博文館から創刊された『文芸倶楽部』における風景描写を追った。当初は美辞麗句表現が多用された文章が掲載される中，滝の高さはどれくらいといったように徐々に自然を数値化して描く投稿が増加したものの，数値の優劣で景色の優劣がついてしまうという批判がおこっており, そうしたことばでの叙景にまつわる動向を検証している。とりわけ着目したいのが,『文芸倶楽部』明治 32 年 2 月号の「時報」欄に掲載された, 明治 32 年に刊行された大橋乙羽『千山万水』（博

文館）への評の中に登場する「幻出」ということばである。ここでは「所謂千山万水を紙面に幻出せしめ」るという，ことばによる風景描写の機能について著わされているのである。例えば第 2 部での梅林も，月ヶ瀬であろうと杉田であろうとこれらの梅は中国の羅浮の梅を読んだ漢詩が踏襲され続けており，時も場所も超えた理想の梅を「幻出」させているといえる。第 8 章では，明治期の紀行文に散見される山岳を表現する「秀霊」ということばを追い山岳観との連関について言及した。

本書では読者＝表現者となった明治期において，美辞麗句表現を中心に作家や文学作品だけでなくいわゆる裾野であり土台であった人びとの文章活動を含め考究することを試みた。これにより文学研究を包括した言語文化史を明らかにできると考える。美辞麗句表現は克服されたのではなく，むしろ脈々と受け継がれてきた表現を当意即妙に用いていくことが巧みな自己表現の一種として評価された近代以降の文章表現の源流であるといえるのではないだろうか。SNS 等により誰でも表現者になれる現代にも通ずるものがあるだろう。

これらを踏まえ，今後は美辞麗句に見られる風景受容の変遷について追究するとともに，美辞麗句表現の辞書を編纂する作業を継続していきたい。そして，自身の課題でもあるが，さまざまな位相の文章表現を含めた視点からエコクリティシズムを考えていきたい。

執筆者について――
湯本優希（ゆもとゆき）　1988 年生まれ。日本体育大学桜華高等学校教諭，立教大学日本学研究所研究員。専攻＝日本近代文学，日本語学，文体論，文章表現論。小社刊行の著書には，『ことばにうつす風景――近代日本の文章表現における美辞麗句集』がある。

エコクリティシズム・コレクション

失われるのは，ぼくらのほうだ――自然・沈黙・他者　野田研一／ 4000 円
いつかはみんな野生にもどる――環境の現象学　河野哲也／ 3000 円
他火のほうへ――食と文学のインターフェイス　結城正美／ 2800 円
〈故郷〉のトポロジー――場所と居場所の環境文学論　喜納育江／ 2500 円
動物とは「誰」か？――文学・詩学・社会学との対話　波戸岡景太／ 2200 円
ピンチョンの動物園　波戸岡景太／ 2800 円
ポスト〈3.11〉小説論――遅い暴力に抗する人新世の思想　芳賀浩一／ 4000 円
反復のレトリック――梨木香歩と石牟礼道子と　山田悠介／ 4000 円
環境から生まれ出る言葉――日米環境表象文学の風景探訪　小谷一明／ 3500 円
ことばにうつす風景――近代日本の文章表現における美辞麗句集　湯本優希／ 3500 円
＊
水の音の記憶――エコクリティシズムの試み　結城正美／ 3000 円
感応の呪文――〈人間以上の世界〉における知覚と言語　D・エイブラム／結城正美訳／ 4500 円

［価格は税別］